

然るに穢りて一方より窺はんか、洋學我國に入りし以來、文物日に開け、技藝月に進み、天下の書生概ね學藝にのみ従事し、武を顧みず、爲めに武道俄然として衰へしが、偶々征清役起るに及び、士民の意氣大に振ひ、東亞の戦始まりしに於ては益々奮ひ、今や至る所演武場を設けて、劍道と呼び、柔道と叫び、或は野球漕艇と稱し、各其技を競ひ、再び武道の興起を見るに至りしは、大に吾人の喜ぶ所あり。

然れども尙ほ裏面を問はんか、机により書を読むことはすれど、武事に至りては、之を賤んで修むるを屑とせず、武道は昔時武人の修めしものあり、敢て吾人の必要を見ずと、唯青面瘡骨を以て榮とあす輩、吾人の稀に認むる所あり、假設夫れ四千萬の同胞をして、過半此の如くからしめば、一旦外交の平和を失せんか、猛獸は其爪牙を磨し、巨鷲は其強翼を張り、陸に百萬の貔貅を連ね、海に數百の艦艦を浮べ、直ちに其の翼に乗せんとす、斯くの如き時に於ては、何を以て之を拒がん、戦事は兵士に委す、吾の興り知る處にあらざるありと、曰うて可あらんか。

而して現今我國の武は、如何に隆盛とは云へ、昔日に比すれば、猶ほ士民の驍勇古へに如かざるに似たり、之を以て今日の強敵と争ひ全勝を得る、實に難き事あり、是に於て吾人は、益々武道を練り、愈々身を鍛え國を擧げて皆兵とあり、以て御國に刃向ふ強敵を殲にし、萬々歳の後までも東洋に屹立して、威を東海に振ひ名を萬國に輝かさんことを、力めざらめや。



文苑

漢文

舊藩主大慈公所畫諸葛孔明肖像記

服部 愛 軒

舊藩主大慈公善繪事、嘗畫諸葛孔明像、以賜我祖光雲君、世相珍什、此畫即是也、戴輪巾、手白羽扇、倚胡床而踞、眉目生動、威而不猛、溫而厲、坐側安甲冑、蓋將出征者矣、按史、孔明自將出征者、平南夷與伐魏耳、此畫雖來詳其在何時、然觀其威德見於外、察其計謀蘊於中、孟獲七擒固其所、而司馬懿甘受巾幘之贈、亦豈足怪哉、余每讀孔明前後師表、未嘗不感泣其忠烈、況於觀其像乎、又況於公自畫以贈我祖乎、恭惟公松巖公之嫡子、而越前納言公孫也、英武有乃祖風、食播之明石六萬石、一日放鷹於野、會接大猷公罹疾之報、公大愕不入城直發、明石距江戶、一百五十餘里、旬日而達、大猷公大喜、欲增封賞之、公辭曰、不願增封、願官道所到、苟有失禮者、得專誅之、蓋此行急遽上途、不暇告報、且昨獵衣、吉原驛長不肯設館、公大怒、焚篝火、露宿徹夜、故有此請云、其英武概類此、然性好文雅、善國風、工筆札、招梁田蛭巖督教學、聘長沼澹齋講輶略、熊澤蕃山亦屢來相見、若乃繪事、特消遣餘事耳、而筆致精妙、非庸工之所企及也、光雲君始筮仕、不過金七兩半四口包、十餘年間、累進任近習隊長、賜祿三百五十石、惜不永世、其所以事公者、今皆不可得而知也、然以公之英武、被寵用如此、則此畫也不獨想見孔明其人、亦可以見公與我祖遭遇之非偶然也、

裔孫章謹記、

蘆谷青山曰、真情流露、自然成文、不求工而自工、文貴真氣、檜信、

秋葉椅堂曰、忽而君恩、忽而祖德、忽而武侯、錯綜爲文、而一絲不紊、所謂氣盛、而言之短長皆宜者、

神童說

第五年級 林 富之助

世稱神童者、視一生中所爲、克成大業、以爲天下有用之人、殆希也、豈才於少時愚于老後乎、抑別有故也、蓋所謂神童者、學術才藝、不必卓絕、特有出儔輩耳、而隣里鄉黨舉而爲奇偉超凡、翕然稱譽之、遂目以之名而其人亦生自負之心、揚々自得、不復研磨砥礪以期大成、若不然則、父兄親戚、夸耀稱贊、使其速得利錄、不使復學、所以終于衆人也、諺曰、十歲而神童、十五歲而才子、過二十歲則衆人、不其然乎、余嘗視古之賢人君子、其始也、或不過仲人、然自知其然、夙夜覃思寢食俱廢研鑽數十年猶一日、終爲天下有爲之人矣、是豈偶然哉、雖然、幼而才者、稟於天也厚、唯受於人不至、終不免爲衆人、況稟於天不厚者乎、老而才者、稟於天不厚、唯受於人之至、終得爲賢人、況稟於天厚者乎、余於此乎知才之不足以恃而學之不可以已也、爲神童說、

修學旅行日誌

△九 日

雜誌部 理事

明治卅四年十一月九日我校生徒殆四百余名、三年級以上は武裝を爲し、以下は制裝して外套を背負ひ、隊伍

整々校門を出づ、時午前八時

天高く風靜あり、觀者門前に堵を築き、金龜城頭群雀囀る。

武裝中隊は玉木先生の指揮に隨ひ、徒手の隊は池田、山本兩先生の指揮を受く、校旗翻々、劍戈鏘々、步調正しく行軍喇叭の譜に伴ふ、方にこれ健兒の一行。

總て生徒隊一同は午前九時四十九分の列車に乗り、氣烟濛々城山を跡に残して大阪に向ふ、軍歌の聲數輛の列車内に轟く。

「君の恵にくらふれば……齊唱瞬時も絶えず、湖南の風光を賞じ、遺跡を談ず、山本先生此邊の遺跡に精はし、欣然滔々と説き給ふ。

列車馬場驛に着く廣田先生來り一行を迎へらる、

「何卒立派にやつて来てくれ、又充分飲食物に注意してくれよ」

と懇語坐るに肝に銘せ、此時他列車に東濃中學校の同乗せるを知る、汽車の發する時正午に近かし、一同行厨を披らき、軍歌の聲絶えて又無し唯々轟々たる車の響あるのみ。

人あり馬場にて新聞紙を求む、我も之を讀む、蓋し聯合行軍の記事あればあり、また見ぬ分列式の噂とり々車中に喧し、或は食麴を食らひ、或は焼餅を喰らふ、車中往々欠伸の聲を聴く、時恰も二時。

右は山、左は川、前は藪、後は畑、漸く吹田驛に近し、前面の丘上先づ眼に入るものはビンヘットの廣告、右の田、左の畑、曰く中將湯、曰く小町紅、又は花王石鹼、の廣告各意匠を凝らして旅客に觀易からしむ、文明の進むに従ひて、其應用も進歩し底止する所を知らず、此れ單なる廣告ありと雖、一は以て自家特種の製品を普く世人に告ぐるを得べく、又一は實に旅客の徒然を慰むるの功ありと云ふべし。

瀛車吹田に着く、眼前の大建築物は即ち旭ビールの製造所あり、思はず盛大を叫ばしむ。
一同下車の準備を成せ、黒煙天を蔽ひ、煙突林の如く目前に塞がる、これ即ち我國第二の大都府大阪市外の光景あり。

列車梅田に着く、これ先年改造せられたる建築にして其壯宏あること、我國中他驛に見ざるものありと、それ或は然らん、然れども予は忽ち俗塵中の俗物化したるが如き感を起し、從て左程結構に感ぜざりき。流石は俗界の大俗分子の凝結したる大阪市、宏壯あること實に吾人田舎者の目を驚かしめぬ、
廳て隊列を正して中島公園に到り、宿所の爲に、級別に分かれぬ、物見高きは都會の習ひとて、聞くに堪へぬ柔々しき言語喋々、妙らしげに眺め居り、奇ある哉、大阪人間の容貌一定せるが如き感を抱きぬ、それより各宿所に向ふ、

此日命令あり、曰く、

十一月九日生徒隊本部命令

宿舍命令

- 一、當生徒隊ハ本日大阪ニ舍營ス
 - 二、夕食后ヨリ午後九時迄散歩ヲ許ス
 - 三、散歩區域ハ大阪市中トス
 - 四、午後九時各宿舍毎ニ人員檢査ヲ行フ
 - 五、明十日午前七時卅分各宿舍前へ二列横隊ニ整列スベシ
- 但晝食各自携帯ノ

五、生徒隊本部ハ八軒屋播磨館

と而して今各級宿舍を擧ぐれば

第一年級甲乙兩組

高麗橋詰町もちや

第三年級及第一年級丙組

高麗橋 もちや

第二年級

京橋三丁目小林政七

本部、第五年級、第四年級

京橋三丁目はりま館

にして滋賀第二中學校も我宿舍の向側に舍營せり、一同夕飯を了へ、浴后己が隨意に散歩し午後九時頃一人二人と歸り來り、各自「視て來た談」に現を抜かし、消燈喇叭の聲と俱に、一枚の蒲團を彼れ是れと、明日の愉快を夢みつゝ、數百の健兒はこゝに軍旅の眠を貪りぬ。

因云、當夜當市吉岡書肆大阪地圖十數枚を本校へ寄贈し、當市南區共和會は訪忠略圖數百枚を寄附したり

△第二 二 日

明くれば九日、起床喇叭に目醒むれば、天神橋畔霜白く、瀛車の笛、製造場の笛、伏見通ひの淀川蒸氣船の笛の聲、牛乳屋の車の音橋上に轟き、名にし負ふ大阪八軒屋の光景、淀川の水に浮べるが如し。

漸くにして、喫飯を了へ、生徒隊本部前に集合す、午前七時と報す、執銃部隊先登徒手部隊を二個中隊に分ちて、出發す時に午前七時半。

先登して城南練兵場に就きしが、未だ一校も來集せるものなし、こゝに憩ふこと暫時、紫色の布面に白色二線を描き、六角の中に「中」字の紋章を金繡したる校旗を翻へして來るものあり、これ我校に次いで來る、紺衣黒袴、白色の沓下に短靴を穿ち、白色布面に赤色スターを染抜きたる校旗を掲げ、銃劍、背囊を着けて來

るもの、これを茨木中學とす、

白布に校名を染抜き、スナイドル銃を負ふて来るもの、これを岐阜中學とす、水兵帽に水兵服、脚絆を着け草鞋を穿つものを忠海中學とす、これ最も今日の服装上眼を引きしものあり、紫色布面に、櫻花に中の字を金繡するものを京都中學とす、櫻に東の字は東濃中學あり、又日章の旗に青色「中」字を染抜けるものは富岡中學あり皆背囊に赤毛布を着けたり、鷹の形に「中」字を刻するものは畝傍中學あり、而して大阪府立中學は皆一定の校旗にして紫色布面に金線二條、櫻章を縫へり、而して第一は羅馬字の「一」を付し、其數に従つて其數字を異にせり、田邊中學は「田」の字の隸書に中の字を以てして、紫色布面に白色を以て染抜けり、其他銃口に小旗を挿せるものありしが、水色縮緬に「中」字を黒く染抜き、古槍を竿とさせるものは即ち我校旗あり、高尙にして卑しからず、淡白にして執固からず、優美にして華奢からず、宛も梶原源太が一の谷の、簾に挟みし梅枝の如く、其古槍を以て竿とさせるが如きは又云ふべからざる趣を存し、自ら敬肅の念に堪えざらしむ、此日堂島中學は義勇旗を掲げたりき、嘗て京都大學運動場裡、關西の健兒を凌いで得たる彼が名譽は今又茲に光彩燦爛として輝き渡りぬ、彼が名譽も亦至大ある哉、乞ふ汝が校の健兒國家の爲に健在あれ予は又優を彼に制せられたる關西數百の校が、又益々今日の彼を想ふて切磋一番せられんことを望む。三重縣中學は赤色を以て中學の文字を白布に染抜けり、此日集るもの二府十六縣の中學、總人員六千人と稱す實に今古未曾有の盛事にして、これを二府十六縣中學聯合行軍といふ、

此日天氣晴朗、氣澄み、此光景を觀んと市民の集り来るもの無慮數萬、城東練兵場外塔の如し、これが爲警察署は百五十人の巡查を派し、憲兵屯所は十名の憲兵を派出したり、といふ。

場は城東練兵場にして、ここに二ヶ所の衛生隊を置き各學校生徒位置には本標を立てて之を示し、一般の準

備整然たり、午前十時いよいよ各學校の位置に揃ふと共に、分列式を開始することありぬ、受禮者村田少將及各學校々長其他來賓文武官は場の北東中央に位置を占め、京都第一中學を先登として、軍樂隊の位置に着き、閱兵を了はるや、こゝを晴れ場と歩調正しく練り出す有狀は、勇ましあんごいふ計りなし、

劍は閃々として日光に映し、勇壯ある軍樂の音調高く場裡に響き渡り、「頭右ッ」の號令は遠くして吾人の耳に聴えねども、今や右方に横隊線の一直線にられるは蓋し頭右せしあらん、砲聲幽かに、中空に爆發の聲の轟けるは、これ吾人を遇せし花火の音、或は軍人を出し、鳥居を形くり、又は旭旗を現はせるは、大阪人の好意に出でしあるべし、一校一校又一校、いづれも將來中堅國民の、若かき時代の談種と、凜々しく合はす歩調、足並、流石に見物の大阪人も眼を醒ませしあらんと國家の爲に慶賀の念に堪えざりき。

我校は何時か／＼と眺むる眼先きは横眼も觸らねど、耳に聞ゆるものは軍樂の調に、傍人の評語。一兵卒あり曰く「彼の長い劍……曰く「彼れが結局中隊長の積やあ……曰く「まだ分列式には早いネ……と、一兵卒よ、汝克く知るは可あり、大軍人として斯道に長するは可あり、雖然汝が用ゆる無理ある江戸ッ子語には悲い哉柔々しき大阪語の下地の尙は剝脱せざるものあるを奈何せん。

第十三番……竿頭の鎗刃を日光に閃かし、水色の旗を翻々たらしめ、一步一調、凜乎として進み来るものは我校執鎗部隊あり、之に次ぐものを徒手隊第一第二中隊とす、之を以て其成績第一等と見しは、予の遠眼かはた又僻眼か、

これに次ぐものを滋賀縣第二中學とすこれ亦、成績よろしかりき。

午前十一時廿分分列式は了りぬ、聯合行軍隊はこれより、暫時休憩して、本城内に向ひ、水道貯水池を觀覽し、軍樂隊營門前にて午食喫飯を成しぬ、各學校は櫻門外近手、多門内の廣場及兵器本廠倉庫前、軍樂隊營

門外、並に監督部附邊堀端邊に於て喫食したり。

かくして一行の喫食を了るや、隊伍を整へ、再び行進を起して、城外に出で天神橋を一直線に又折れて中島公園に入り、先登の堂島中學に達するを合圖に、號砲一發轟き渡りぬ、此行路或はアーチを設け、又朝日新聞社は軍樂隊を聘して中流に船を浮べ、以て行軍の途を歓迎したり。

これより各校は分れて各宿舍に歸りぬ、時維れ午後三時過ぎにして、靴は砂塵に蔽はれ、汗は戎衣を濡したりき。

一同の旅宿に歸るや。一日の疲勞を一浴の風呂に休め、三々五々相伴ふて市街自由散歩を試みぬ、予も亦淀川の夕景を賞し、やがて道頓堀、千日前の光景を見んと志しぬ、各校の生徒尙ほ皆此地に逗まり、相携へて散歩するもの數を知らず、皆肩を凝らし、眼を怒らして行く、嗚呼又奇ある哉、予偶々此壯士劍舞を観る、恰も人形の躍るが如く、小兒の戯るゝが如く、而かも滑稽諧謔を交へ、其歌ふ所は卑俗ある壯士歌に過ぎず而して今日此劇場は觀客滿々たり、予は一睨して之を出でしも、これを見て得意に、快然たる滿場の人間の、國家の爲悲哀の情に堪えざるあり、國家元氣の衰微せる、獨り予は此地に於て一層の打撃を受け、又一層憤激の情に堪えざるあり。

大阪は商業に於て生き、人間に於ては皆死せり、といふべし、此夜朝日新聞社は通宮皇孫殿下の御眞影を寄贈し、當地水族館は「聯合行軍隊員」てふ名札を贈りて、見料を割引したり、此夜外出門限午後十時にして水族館觀覽に趣くもの多かりき。

消燈の喇叭は耳を劈きて戸外に響き、軍旅の健兒は夢尙ほ結ばれず、唯々今日の狀況を談じて、知らずく幻となり、幻は眠りに變じ、睡りは夢と疑まる、

知らず數百の健兒、今何をか夢みる、淀川の水は流れて遠し、流笛一聲闇を破つて鳴る

夢結千里華胥國。

△十一日

六時四十分起床、八時集合、徒手にて中之島ある造幣局を縦覽す、局内は総て試金、溶解、彫刻の三部に分たれたり、されど吾等は只外部より窺ひしのみあれば、内部に於ける機械の構造の如きは悉しく知る能はざりしと雖も、其金銀の貨幣を取り扱ふ様は宛ら箕もて塵芥を扱ふが如し、其他金銀の杯、勳章等の標本及び金銀の大塊あり、孰れも實に高價の珍品あり、かくて局を出で數時間の自由散歩の後、網島停車場に到り、汽車にて四條畷に向ひぬ、五時四十五分四條畷に着き、畷ホテルと云ふに投じぬ、四條畷は實に山間の一僻邑に過ぎざれども、汽車の便あり、且つ旅館の如きも壯大あるものあるは全く小楠公神社あるを以てあり

△十二日

十二日晴、六時四十分起床、出發以來の好旅宿にてよべの寐心地殊によりき。いとよき旅館の三つまで立並べるもみち正行公のみ恵みありけりどうかづかれぬ。

出發迄四條畷神社に自由參拜を許され、旅宿を出づれば高やかある碑あり、之れぞ我先輩西村翁の首唱斡旋の結果に成れる征清紀念碑にして、表面には忠勇報國遐邇具瞻の文字あり、そのかたへ十間とは隔たらざる所に梅原梅屋翁の碑といふが立てられたり。神社は飯盛山麓に倚り、境内所々に植ゑられたる若木の櫻や神籬に沿へる萩の葉の色づきたるあざ捨て難き風情あり、將た又二三の露店を張れるには、神聖をけがすやの感かきにしもあらず。うしろの谷間に櫨か楓か焰のやう紅葉たるあざ、遠近の眺めよろし。

禮拜を終りて華表の下にたゞすめば、公が決意の百四十三騎と諸共に、汗馬に鞭つて縦横に馳突せし光景映

じ來つて立ち去り難く、願望低回の情に堪へず。

之れより先き、二年級全部を以て組織せる第一小隊は豫定の七時に、武裝の三四年級より成る第二小隊は、八時前已に此處を離れ去りて、残れるは一年級全部及び、落後の者より成る第三小隊のみ。豫定の九時はすでに三十分まへに過ぎ去りしが、茲に幸運は生じぬ、他をいそは、寶物の拜觀を許されつるあり。急いで事を仕損するあんごうへらす口たよくもあれど、喜色満面は誰しもありき。かくて拜觀を得つるものは

土方伯よりの獻納にかゝる公の畫像の一軸（日本外史中の新田氏の章と、かへらじこの歌を以て、長州人林如川の畫きしもの）、

捨三翁、因幡侯より獻納の大刀各一口、

最後に折角丁寧に示されしは、まらびやかあるこしらへの大刀一口、明晃々、露のしたゝらんばかりにて、承平年間長船長則の作ありと、こはこれ、今上陛下公の誠忠をめで給ふのあまり、御下賜ありしものありとか、かゞはしきかゝ公の忠勇義烈。

直ちに出で立ち、目的地ある奈良に向ひ、山村僻陋に入る、道路はいと險惡あれど、仰げば天つ領巾かどうたがはるゝ、黄色のはあれ雲、悠然岫を出でゝ、目路さす彼方に辿り行くに、樂しき思胸におどる。しばらくにして、山峽の坂路を進むに、妻木こる山かすかすみかにや、賤が伏屋の二ツ三ツ見ゆる様、さながら大古のやうにて、浮世の外ある此の平和の境、うるはしくもまた羨まし。かくて、息もつきあへずのぼりにのぼり、山頂に達すれば、身は崗巒重疊の中に立ちて、おもむきすべて幽寂あり。下り坂もかゝゝ容易の道には非ずして、泥濘いとゞしく、足の甲まで沒せむばかりあるに、ほとゝ困じはてぬ。

曲折すること數回、一里ばかりにして、やゝ開けたる谷に出づ。田原村躰育場と標榜したる、小規模ある運

動場ありて、機械躰操具の二三迄備へ付けられたりしには驚かれぬ。是よりさき、我小隊は斷々として續き先登と後尾とは、約四半里許りもありたらんか。

多くは茅葺の屋根、荒壁の農家二十戸計り簇立する部落に入るに、取付きより四五軒目の枳殻の生垣に、結び付けたる紙片に「此の交路の右の方をとるべし、時に九時三十分」とあるは、先發の武裝隊が我隊の爲めにせしものと推せられて、此處より分岐せる道を、何れと撰ぶ煩ひもなく、こよかうれし。かくてうら寂しき枯野に出づれば、こゝかしこに、茂林、岡丘ありて、茅屋のその半腹に立てる、風趣言はん方あり、まことうるはしきは深山里ありけり。

南田原村、上村は蕭條たる村里にして、別に眼に入るものゝてはあけれど、田原村より道に沿へるいさゝ小川のこゝに至りて、やゝ其巾を増し來り、せゝらぎのさゝれを洗ふ音、つくし琴のしのび音に似通ひて、遊子の旅情をさぐさめ顔あり。

二名と呼べる村に入る。里のうあるの十には足らぬ程あるが、兵隊さんやゝゝとて、おどろき狂ひ、あはおさかきはわれ等の容態をいぶかるものゝ如く、またゝきもせで見つめてあるを見受けぬ。かくてこの村をはづれ又もやうら枯の野道を行くに、水車をしかけたる小屋ありて、守る人もあきに、かたさゝと拍手おかしう傳へつゝ、つゆ怠る氣色あり。尙さきの川に沿ひて行くに、武裝隊の川の堤に中飯したゝめ、いこひてあるに追ひ付きぬ。勿論此の時吾等は、第三小隊の先登あり。そこに吾等も腹をこしらへつゝ、いざ憩はんとするに、武裝隊は、早や進行を起しゝかど、續かん勇氣もいせず、一時あまり經て出で立つ。一の橋ありて、其袂より道は再び分岐せり、先きの部隊はいづれを取りしか、くつと覺はしき足あとに、大方それとは推せられど、あは覺束あてかたへの茶店の老嫗にたしかめ、左を取り橋を渡り、今し、散り透く森にはさまれ

たる、爪先上りの沙路にかゝる、少時にして、この坂路を越し、あだらかなる刈田の面を蛇行せる道をたどる事やありて、又も松や、雑木や、楓など毎樹の葉色同じからざる茂林の中に入る。道もせに散る枯葉をふみしだきて進むに、小春日和のふどけき今日とて、今迄は、汗もをり／＼額より落ちし程ありしが、忽ち冷爽の氣、肺腑に満ちいと心地よし。木立のすき間より、古く音にも聞きて、床しと思ひ渡りし三笠の山の見え隠れするより、青丹よし奈良の都に身を置かんも今一息と、つかれし足を促がして、林を通り抜ければ近く目に入るはうちも變らぬうら淋しき田圃の景色、遠くは國境にやあらん、連山遙にはの見えて、少女の眉ひきあすが如し。

伏見村にて、村娘の機織る窓に立ちより、奈良への里程を問へば、顔打ち赤めて答へんともせず、重ねて問ふべくもあらねば、そがまゝ急ぐに、頬かむりせる里人に出逢ひたれば、すかさず尋ぬるに、二里弱といふに力を得て、おほひたすら急ぎ、人家や稠密ある疋田といふ小落部を後にする、頃三笠山麓幾多の大建築は現はれぬ。御陵と覺ばしく、柵や、濠にて打圍うたる小丘の、田畝の中に立てるを瞥見して、都跡村を過ぎ、暖道を一直線に進み、三時四十分身はすでに、大なる歴史をつゝみて、一行を迎ふる家屋稠密の奈良市中にありき。

奈良公園の西北端、猿澤の池に近き、〇〇屋と云ふに、草鞋のひもをこく。大佛殿や、博物館の觀覽には、残念かれどすでに時遅れて、詮方あさに、二階の一間に身を延ばしてありしが、夕暮時に、出でし春日の森をさまよふ、幹は二抱へも三抱へもあらん程の、年古りし杉いかめしう立並び、木の間もる落日の光さし入りて、反照よこさにこがねを引き、神々しさ言はん方なく、あるは、小さき楓のよく紅葉たる下に、目尻うるませて雄鹿の立つに、秋のけはひの身に泌み渡りぬ。日くれてより猿澤の池の畔にゆく、寐きたれ髪をこの池の、玉藻とばかりあびかせて、かたみの衣をかけてふ柳の下にたゝすみて、また／＼如き電燈の光影をうつす水面をかむるをりから、燈影まばゆき彼岸の樓上より、三絃の音につれて、あまめきたる女の聲さへ聞ゆるに、腹立たしくていそぎ宿に立歸りぬ。

△十三日

夜一夜奈良の都に假寝して、けさ夢さめしは午前五時ありき、驚き起きて客窓を排せば、曉霧一抹若草山の半身を罩め、朝風冷やかに羈客の面を掠めつ。

午前七時、集合喇叭の音に應じて一同宿舍前に整列す、青木校長代理より本日の路程を變更する旨を達せらる、蓋し吾人の奈良に停ること少時、従つて多くの名蹟舊趾も訪ひ遺さんことを慮られてありとぞ、吾人こゝに多謝し、即ち七時出發を延期して十二時とせらる。分れの號令と共に三々五々分れゆく先は、東大寺の大佛か、博物館の古器物か、はた興福寺か春日神社か、昨日すでにこれらを見終りし一群の三笠山に登りて、仲磨の月もがあと語らへるも、げに昔を偲ぶ情あれや、九重に匂ひし奈良の舊都のそのかみも、いとゞ思ひいだされるゝにあむ。

鐘がて十一時ともかれば、彼方此方より歸り來れる一群二群、漸く列を全ふして停車場に向ふ、秋光破帽を照らして、日午あらんとし、健兒麋鹿を撫して別をつけぬ。

十二時四十分の列車に搭すれば、一聲の流笛と共に早くも北に向ふ、「さらば閑靜なる奈良よ、ささくあれ」と云ふ間もなく、無心の流車は飛家走林を後にし、一二の寂しき驛を過ぎて、午後二時といふに笠置驛に達しぬ、車圍を排して出づれば、それ／＼松髪杉衣、幾百年の昔を包んで靜かに立てぬ笠置の一峯。

三時迄に下山すべしとの命令に急ぎつゝ、八町の坂を喘ぎ／＼登り盡せば、案内の老翁口を極めて説明の勞

をとり、この石は動石、あの岩は貝吹岩、そは胎内くゞり、こは薬師石と、具さに語りしふしは、一行の等しく聞きし所、且他書に普きもの、今こゝに贅するの要もあかるべければ省きつゝ、されど、山頂南にめぐる所、一むら茂れる木立の下に立ちたる一基の木標は、これぞ後醍醐帝行在所の舊蹟、あはれ如何ばかり吾人をして五百年の昔を偲ばしめ、乾きたる臉に時あらぬ露を宿しめしぞ。

延元の昔逆賊北條、陪臣の身を以て飽かぬ無道をきわめ、天に悖り地に背き、恐れ多くも一天萬乗の大君をして、この僻陬に蒙塵せさせ奉りし大罪、想へば胸も裂け牙も鳴る心地ぞする、加之、當時天下百萬の臣民にして、楠廷尉、左中將等二三の忠臣、その手に屬せし若干の義士を除いては、一人として忠魂發奮する者あかりしか、天が下に至尊の隠れ家あきまでに暴逆を敢てせし北條一門の罪固より大ありと雖、しかも過古千五百年間に祖宗の遺し給ひし義膽を、北條一時の勢力に屈伏せられて、そが願使に甘んじて皇室を惱め奉りたりけん人々の罪惡は、豈天地の容るゝ所のものからんや、あはれ、九重の雲の奥にましくゝて、千人の宮女にかしづかれ給ひし君の、如何に亂世の淺ましきとは申せ、又如何に北條の暴戾にして國民に忠義の輩の少あかりしとは云へ、この岩角こゝしき嶺路のさゝやかある行在所に、玉体を隠させ給ひ、峰の嵐は賊軍の吶喊の聲か、谷川の音は敵兵の轡の響かこ心おかせ給ふさへあるに、鬼ごもの今しも荒らぶれて攻め寄せしときこしめし、落つる涙をませとてか、そぼふる時雨にぬれ給ひ、藤房一人を頼ませ給ひて、「さして行く笠置の山を出でしより、天が下にはかくれ家もなし」とて落ちさせ給ひけん時、そも如何ばかりあさましきあげかせ給ひつらん、風雨幾百載の今日に忍びまつるさへ、心きゆる思ひのあるものを、おのれやれ、思へば惡き仇の北條、思へば云甲斐あき祖先の人々よ、袖ぬらす松の下露に身を震はせつゝ、あどて吾等にかばかり物を思はするぞ。

思綿々として盡きせず、血涙滾々として衣袂をうるはせど、傾きそめる秋の日影に驚き、見歸りがちに山を降れば正に三時、やがて來れる列車に乗りて、笠置を發せしは三時を過ぐる四十分ありき、車窓によりて懷古の涙を拭へば、心ありげの雲一朵、見る／＼笠置山の頂をかくして、永劫つきせぬ悲哀の歴史をつゝみたりぬ。

汽車は、一行が懷舊談を載せて、木津の清流の涼々たるに沿ひ、眞帆を迎へ片帆を送り、間もなく「おほがわら」驛につく、それより二三の隧道をくぐり、土地平坦ある高野を縫ふて走ること少時、高低波のごとき彼方より、細く立昇る縷烟數條も、他郷の眺めは又一しはありあど語るうち、「しまがわら」驛につく、これより汽車は懸崖倒れんとするがこき徑路を馳せて、一二の驛を過ぎ、午後四時四十分上野驛に着す、隊伍を整へて東行すること半里許にして上野市街に入り、各級豫め定められたる宿舎に入りしは正に五時半、暮色全く四山をつゝむの頃ありき。

因云、午後九時迄自由散歩を許可せられたり。

△十四日

起床六時、戸を排して天の一角を望むに、幸あるかか、天色晴朗一片の雲だにあし、倉皇準備を整へ、一行上野停車場に向ふ、昨日黄昏にして着き、今日は早朝より辞することあれば、此地の古跡を吊らうの暇あかりしかば、最どゞ名ごりおしくて、道すがら、彼方此方見廻す折りしも、彼方に數馬餅と招牌掛けたる家あるを見る、扱ては、此の邊りにてぞあだ打ちはありしからんと、懷古の感、胸に迫りて瞑目すれば、其のかみ數馬主従が忠孝に、凝りたる鋒先鋭く、不俱天戴の仇と、奮戰激闘せし様、あり／＼と眼前に浮ぶを覺ゆ郊外に出すれば、左程にも思はざりし霜は野邊一面を掩ひ、時あらぬ六つの花の積りしが如し、折りしもあ

れ、延々疊々たる四方の山々を立ちこめし淺霧、旭の昇ると共に全く消散し、清光野に滿ち冷氣人に迫り精神爽快あり、かくて吾等一行は、凡そ三十分計りにして停車場に着きぬ、即ち九時發の列車にて植拓驛に向ふ、車窓より顧みれば、上野城の天主閣は、巍然として天を突き依々として一行を見送るが如し。例の無駄嘶にも飽き、車窓より下瞰すれば、木津の清流鐵路に添ふて走り激しては、石を噛み、掛りては水簾とあり、或は淀んで碧潭とありて、旅客の勞を流せり、此清流を隔てて連山長蛇の如く、滿山の紅葉は、木津の清流に映して、錦繡を洗ふに似たり、益々進めば山勢は、奔騰して逸馬の如く、流水委曲して驚蛇に似たり、車の輪のめぐり廻るにつれ、木津の清流も遂に木蔭に隠れて見えなくなり、緑の葉繁りし權木の、霜に酔ひて鮮ある真紅、あるは樺色とありて、錦のそれをもあざむく計り、互に美を競ふ、秋の深山の景色は又格別あり折りしも耳を劈く瀛笛の音と共に瀛車は暗黒の内に入れり、二分計りにして出でつ、窓外の新しき空氣、吸ふ間もなく、又一墜道を過ぎぬ、此より風光一變し平楚千里肥沃の原野に、秋穀繁々として、農夫の稻蒔る手、忙しげある田野にぞ移りけり、瀛車は漸くにして、十時頃植拓驛に着きぬ、此所は草津への分岐驛なれば、旅客の上下を多く其の建築物も、奈良よりは、數等優りて見ゆ、之れよりくねりくねりと、回りたる伊賀街道を勞れたる足引すりつゝ貴生川驛に向ふ。

行く一里丈り、道傍の森の下蔭に憩ふ、十五分計りにして進行を始めつ、此の邊りは前には、廣原渺々として、小丘の處々に起伏するあり、後には峰巒逶迤として波濤の如く、秋草の微風に靡く所、農夫の稻蒔るあり、實に無爲靜閑ある別乾坤、都人をして塵襟を拂はしむ、漸くにして山の端に近ければ、先きには、おぼろに赤う見えし、紅葉の最鮮あり、此に於てか、軍歌と聲高に歌ひ始めしが、忽ち後の方より新發ある「ホツテトニホツテト」も起りて、おさく足の勞を忘れしめたり、かくて歩むこと、二里弱にして一の松林を

過ぐ、中に榜示杭あり曰く從是滋賀縣と、あはれ數日の間他國に遊び、旅寢の枕に夢みたる故郷の、今や眼前に浮ふ、誰か欣然たらざらんやは、仰て遙に望めば、近江富士伊吹の諸山、雲表に聳へ、呼べば當に應へんとす、我郷果して何れの邊にあるか、かゝる程に日亭午に近ければ、唯或る川岸の木蔭によりて行厨を喫む、食后直ちに、進行を始めつ、衆滿腹の勢もて、急進貴生川驛に向ふ、三里の道一飛に行かんと、氣のみあせれど、兎角進まぬ足、最どもをかし、さは云へ數日來の勞に、三百の健兒も、一步は喘き一步は躓くも是非あき次第にこそ、迂回又迂回、大里小里とたどるもどかしきに、吾れも人も一足飛びに飛まく欲すれど翼あきを如何にせん、漸くにして劉曉たる喇叭の音高く、貴生川驛に入りしは、午後二時二十分ありけり、乃ち三十分發の列車に投し、午後五時無事歸校せり

白石嶋に遊ぶ記

第五年級 岩崎健三

余笈を負ふて彦根に來りしより以來、節を湖邊に曳き、又は金龜山に登り、遙かに多景白石竹生の諸島、細波渺々たる裡に鷗の如く浮べるを望み見る毎に、遊意勃々として禁する能はざりき。

春光既に辭し去りて、金龜山頭新緑濃かなり、いざや短艇に乘じて琵琶湖の碧波を凌ぎ、多景白石の勝を探り多年の宿志を遂げんと、同窓の友七名と便乗せられし杉浦先生と、一行八名早朝より勇ましく八景亭の短艇繫留所に到り、諸般の準備を終へ、スタートの號令と共にクラッチの響オールの音勇ましく白石島として出發せしは、去歲五月二十六日ありき。

此日晴天にして微風面を吹き、爽快なる事えも云はれず、程かく松原橋の下を過ぎ、小船の並べる中を通り抜け、松原川口より漫々たる琵琶湖の中に漕ぎ出でぬ、眼を放てば漂渺たる碧波細漪織るが如く杳として其涯を知らず、近く礫山の岩に碎くる波の音も静けく、遠く長濱町の白壁樹間に隠見するところ、黒烟淡く棚曳きて、流笛の聲の微かに聞ゆるは湖水通ひの小蒸氣船今や長濱を出でたるからん、多景島は翠色滴るが如く呼べば應へんとす、白石島は白帆の浮べるが如く、漁舟は點々として其間を往來せり、其絶景筆紙に盡す可からず、余等は軍歌の聲に合せてオール先の白波を蹴立つれば、舵手は慣れたり漕手は達者あり、波間に浮べる水鳥を驚かしつゝ進み行けば、先手の一艘はも我生徒が遙かに多景島として急ぎ行けるにいつしか追付き、談笑の間舳を並べ間もなく多景島に着きぬ。

此島は周回三四町の小島かれど、其姿の優美にして、加ふるに全島岩石より成り、竹樹其上に叢生せ、其眺望の奇ある余はむしろ竹生島も及ばざるを覺ゆ、其水透徹遊魚數ふ可し、余等は相携へて岩を攀ぢ見塔寺に至る、寺はあまり大ならず、又僧侶も住せず、只一人の老婆が留守居せるのみ、本堂庫裡等も荒廢に赴けり島の北方に斷崖高く聳え、大字を以て南無妙法蓮華經と深く彫り付けられたり、これ空海の作と云ふ、寺守の老婆の盞茶を汲み來れるに、雑談に時を移す、老婆の語る所によれば、この島は民家とては一軒もあき所あれば、米鹽等を要する場合に如何にするかと云ふに、そは鐘をつきて之れを報ずれば、八阪地方の農民船に積み來りしが、戯れに鐘つく人あご折々ありて不都合あれば、今は高處にて火を焚きて相圖を爲すと云ふかくて島を廻らんとて出でたつ、歩むたびに空壺の底を踏むが如き音を發す、頗る奇あり、暫くして樹木の間を出づれば屏風の如き斷崖數丈水中に斗出す、是に通する一條の細徑あり、纔に一人の足を容るゝに過ぎず、一步を誤れば不測の淵に陥る、長さ十間許にして俗に蟻の戸渡りと稱す、此處をすぎ大ある岩の上に攀

ち上れば、此處は島の最も高き所にして、比良瞻吹龍山の諸峯は波濤の如く湖上に起伏せり、眺望絶佳衆思はず快哉を叫ぶ、

余友を顧みて曰はく、由來江州の地風景の美を以て天下に鳴る、これ琵琶湖は洋々として万頃の波を疊み、瞻吹比良等の高峯は屹然として空に聳ゆるを以てあり、今や湖中塵外の境に居り、巖頭に立ちて長嘯し、天下の美景を一時の中に收む、豈快からずやと、彼等も又恍然として自から忘るゝが如し、折柄彼方より連りに呼ぶ者あり、至り見れば衆悉く艇に乗り居たり、即ち俱に白石島として艇を進めぬ、かくて暫くの間は吟詩唱歌を爲す者、且笑ひ且談じつゝ行くほごに、いつしか白石島に近づきぬ、仰げば湖中の巨岩其色雪の如きが屹然として高く聳え、其傍に三つの稍小ある巖あり、遠くよりこれを望めば白帆の湖上に浮べるが如し、巖上一つの樹木なくまゝ雜草の生ずるを見るのみ、余等其間に艇を入れむと漕ぎ行くほごに、一羽鴨此處より飛び出でたるが、島の周りを幾回となく廻りて離れ難き狀あり、余等怪しみつゝ艇を曠して稍小ある巖上に昇らむとせし一刹那、羽音高く一羽の鴨飛び去りたるに、あつと驚き走り寄りて見るに、十二個の卵巢の中に丁寧に並べあるにぞ、共に不意の獲物を喜び合へり、されど其身の危機に切迫するも猶卵を見捨てざる雌鴨のいかに悲しかりけむ、暫しは近く余等の頭上を回翔して止まざりしには、子を思ふ親心の推し量られて思はず哀れを催しけり、それより巖上又は艇にて各自晝飯を了り、竹皮にて戯れに船を作り、石にて打沈めあごして楽しむ、更に最大の巖の下に着き絶壁をはひ上る、其危険あること云ふ可からず、登り了ればこゝも又其趣き多景島とは異なりて面白し、此處は水鳥あごの休息所にやあらん全部殆んど鳥糞を以て蔽はれ、年經し者は化石し、さてこゝ巖の色を白くしたるあれ、此處にて杉浦先生より煎餅を頒たれ巖上の茶活會は開かれたり、衆且喰ひ且談じ高談盡くるを知らず、時に北風漸く吹き來り湖面漸く波荒くありければ

割愛歸途に着く。

此時より波荒き爲め艇の動搖甚だしく、櫂の操縦に不便を感せしが、兎角して再び多景島に歸り着き、一先休憩せんとて見塔寺に到り茶を乞ひ、嶋の南方に水晶ありこの事あれば波打際の岩の窪める處に手を入れ探しかざして時移るを知らず。

兎角する中に風は益其勢を増し、怒濤巖を咬み飛沫雨の如し、凄まじさ殆んど言語に絶せり、されども今更風波を避けて一夜を島影に明さんは丈夫の耻づる所、衆大に決する所あり、猛然として艇に飛び乗り嶋を離れぬ。

果然怒濤は島を離るゝや否やざんぶと許り艇に入り、其勢艇を捲き込ますんば止まざるが如し。

風波は北より襲ひ来るを以て、彦根に向て直進せんは元より出来能可きにあらす、されど波に向て進まんか遂に北近江に達せん、こゝに於てか舵手は意を決し斜に波を受けつゝ進み、必死の力を出し智囊を絞りにこれと戦ひ、漕手は腕の續かん限り呼吸を計りて猛進す、然れ其波は其高さ數丈に及び、屢々頭より水を被り且櫂を水上に上ぐるを妨ぐるを以て其進行實に意の如くあらす、寸を進めて尺を退くの感あり、見る／＼艇中は腰掛まで水の浸す處とあり、殆んど水中に居るに異あらず、加ふるに水を汲出す器あきを以て、止むを得ず余の上着を脱して水を艇外に絞り出し、必死の盡力にも拘はらず、從つて絞れば從て入り、水量器増加し轉覆せんことを屢々ありしが、辛ふじて磯山の稍北方と並行の位置に來りしを以て、舵機を轉じて彦根の方向に艇首を變せしかば、風波に追はれて箭の如く、瞬時にして松原に入れば、轟々たる怒濤は波止場を越へて餘沫衣を濡はすに至る、已にして八景亭の短艇繫留所に歸着し濡鼠の如き運動服を絞り絞り、互に無事を祝しつゝ岸上に立ちたる時は、已に黄昏に近く金龜山頭の鐘聲段々として、歸を促す、猛濤の聲耳朶を

打つの感ありき。

河内村之洞窟

第五年級 松居源四郎

垣根に咲く、朝顔に、おく露滋き頃ありき、前日より、約し置きし、事あれば結束して、朝疾く、宿を立ち出で、河内村の洞窟探検にと、出で立つ、同行者、予と合せて六人、各自思々のいでたち、校服、運動服、和服、何れも、跣に脛をかためて、草鞋がけの腰辨當、麥藁帽子を、阿彌陀にかむりし、異様の一行、彦根の町を、東へと歩しぬ。

鏡の如く、すみわたる、蒼空に、焼けつくばかり、輝く日の光に、彦根の町を、離るゝ頃は、既に汗流れ初めたり。

緑深き、青田の中を、うねりし里道を、たどりて、二三の村落を過ぐれば、道は此より荻河畦を傳うて、爪先上りの、山徑とある、山又山、重なりて、額の上にせまり来る、右手はこゝしく、巨き岩の巖の、飛石のごとくに、參差として峙立つ間を、流れては、淀み、よごみでは、流る飛瀑とある、芹の河水、左手は、うち續く、山々の緑茂く、河を越えくる風、双の袂に満ちて、涼しさ云ふばかりなく、此あたり、暫し夏を忘る途中遙に、斷崖の一端より、ひらめき落つる、一條の細瀑を見る、此れあん、栗栖の瀑ありける。

午前十一時といふに、河内村に着く、彦根より、此所迄、大凡三時間余を費せり、村は河を狭みて立つ、數十戸の小村落、四面山をもて、囲まれ、清流をが中を貫いて、せゝらぎの音、河鹿の聲、優し。

友の知る、家に入りて洞の案内を乞ひぬ、吾一行の中には、洞窟の、方位さへも、知るもの、なければなり。晝餐を、此所に終へて、更に身輕に装ひ、手々に、松明一束を携へ、此他に、不時の、用意にもとて、蠟燭五本と、提燈一張、麻繩一條、ナイフ、等を持ちて、いざと、出發つ、案内者は、年若き男あり、數度洞に入りし事、ありと云ふに、まづ心強し。

芹河に傳ひて、溯る十數町、右に折れて、峻坂を登れば、此の一躰、岩石あらはに、矮樹生ひたり、樹によりて、疊々たる、岩を傳ふて登れば、洞の入口に達す、洞口は、巨巖の一部、僅にあらはれたる下に、辛うじて、躰を入るゝばかりの、穴隙あり、先づ外にて、松明に、点火して、一人初め洞に入り、外より松明をつきやれば、中のもの、此れ等を、一本づゝ、引込むあり、やがて總勢這入終る。

入口は、手を延さば、天井につくべく松明がざして、二三間進めば、こはそもいかに、窟は急に廣大とありぬ、松明高くさゝげて、見れば、漸く天井らしきが、ほの見ゆ、恐らくは、數十尺の高さあるべく、僅に薄く見ゆる、天井は、例へば、簇雲を、大空に、仰ぐが如し、而も一点の、星影さへもあき、此洞、一寸先も分らぬとは、此事あるべし。

小山の如き、岩石重なる間を登りつ、下りつ、奥へ奥へと、進むにつれて、洞は益々廣大とある、吾等が、脚下は、水流ありと、思しく、滔々と、恐ろしき、音して、ひゞきたり、其の流の、一部にやあらむ、岩と岩との間、清水湧きつゝ、岩の下へと、流れ去るあり、冷かある事、氷の如し。

濕氣を帯びたる砂は一步毎にざく／＼とあやしき音立て岩を傳ひて落つる水一滴又一滴つめたく額にかゝり物云へば、凄味ある、反響を、傳へて、何處ともなく、吹き來る涼風、ひやりと、膚を犯すを、其のもの凄さ、身は奈落の底に、落ちし心地ぞする。

上を仰げば、危岩今にも、崩落せむとす、吾が蹈む、岩の下は、水流輕踏として、巨濤の、うちよするが如き音、洞中にひゞき渡り、其恐ろしさ、身の毛もよだつ許り、吾等覺えず、顔見合せて、物も云はず、しはしは、ためらひて、得進まず。

斯くて、止むべきにあらねば、互に勵ましつ、勇を鼓して、大聲に、軍歌をぞ歌ひつゝ、猶奥深く、進むに洞は、漸く狭く初め、終に前の入口の、如くに、すばまりて、止まりぬ、此所迄、洞口より二町程あるべし、引き返して、もと來し、反對の側を、傳ひて「二階」を見んとす。

洞壁一丈許り上に、更に一洞窟あり、此れ二階と稱するものあり、古より、此の奥を、極めたる人なく、登り見し人さへも、少あしと、見上ぐれば、數尺のうへに、一の岩窟ありて、足を止むべき、余地あり、其上に、少し突出せし、岩あり、其の上は、即ち、二階の入口あり。

危い哉、一步誤れば、突失して、刀の如き、岩にうたれて、躰は、さながら、粉微塵とあるべし、登らずに歸らむと、云ふ者さへあれど、予は斷然登り見るべしと、主張するに、案内人は、慣れしこととて、身もかるがと、岩をよぢて、登りぬ、予も劣らじと、續いて、登れば、他の二友も、又辛うじて、予が後に來りぬ、その中の一人、片手は岩に、他の手は、余之れを助け、両足宙にぶらりと、下りて、救を呼びつゝ、もがきしかば、予迄も、共に落ちん許り、必死と、岩にしがみつゝ、他の友の、力によりて、漸く無難に上らしめけり、他の三人は、遂に登り得て、止みけり、彼等を残して、吾が党四人、深く進まんを、此所は、下の如く、廣からず、松明の煙堪へ難ければ、提燈点してゆく、右に折れ、左に曲り、上に登り、下に下りて奥へ奥へと、進むにつれて、變りゆく洞の様、岩皆尖りて、鐘乳石を、あまた垂れたり。

奥は、追々、狭り來りぬ、さりとて、尽きしに非ず、這ひ行くべき所あり、身を横にして、行くべき所あり

り、頸をぢめ、膝を曲げ、身を低くして、行くべき所あど、種々の困難を、冒して、進むに、初めは、人の足跡、松明の、焼殘等ありしかど、今はそれさへも無く、只氣味悪く、水氣を含める風、面を吹くのみさては、此邊、人跡全く絶えしかと、思はる。

岩と岩との間、せまりて、洞は此れにて、尽きしかと、見れば、さにあらず、猶奥深き事限あし、斯の如きもの、數度、洞は何時つくべしとも、思はれず、斯かるに、何處迄も、盟ひし友の、瓦斯の爆發恐ろし、或は呼吸苦しくありしかど、心細き事云ひ出で、歸らむと云ふに、強ひて勵ましつゝ、行かんとせしが、止ぬる哉、蠟燭は、残り尠くあれり、即ち止むべく、引返しぬ、數町は來りしと、思へり。

やがて、元の口へ歸り、用意の麻繩を、岩石に掛け、兩端を帶に、結びて、岩を傳うて下り、皆下り終れば繩の一端を引くに、繩は手にあり。

総勢、無事外界へ、出でし頃は、午后二時過ありき、急に此世に、現はれし、心地す、衣の砂泥に、汚れしを、拂ひあどして、河内村に歸り、暫し休らひて、装を整へ、芹河に傳ひて、下りぬ。

おこゝひがたり

第四年級

澤村 專太郎
木村 二郎

姉

一ひらの雪ひら／＼と空に舞ひて、去歲の名殘の桐のくち葉が上にひらめき落ちぬ。さませ弟よ、空の色いたう曇りてくろき色したる雲の流れゆくさま、いかに面白きよ、みは何處にかいます、文机のほどりにとや

かたへのふみをお取り亂しそ。またも一ひらの雪ら／＼と、こたびは破れ垣の梅の花枝にふりかゝりぬ。

弟よ、きまさずや、雪の姫、み空に白妙の衣の袖をひるがへし給ふに、

弟

姉の君、何ぞ……來よとや、いたう美はしとや、いで……

さては初雪あるよ、黒犬も裏にて狂ひてやあらん、うれし、ひげばこそめの霞立ち、春の小娘鶯の、妙ある歌の一ふしに耳傾けんも近きうちあり。

忘れもやらじ姉君よ、兄上も——いまは東の空にいます——銃をにあひ、勇める黒犬を伴ひて小鳥狩あしつるは去歲の今頃、さあり、その折もいかめしき雲空を流れ、小雪ちら／＼舞ひ落ちたりき。姉君、さ思ひ給はずや、

姉

さかしも心にどめていますよ、さありけりや。昨日のやうに覺ゆるに、はや一年の昔とありしか。兄上はいまいかにこの空を眺めておはする。風のあした、雨の夕、忘るゝほどもあきに、……げにをのこほご心無きはあらじかし、こゝ一月のまゝたよりさへあきに心痛めぬるを、……いかに事多ければとて故郷ある二人の同胞に、音信だし給はぬとは。あはれ、せめて母君のうつし世にいまさば……

弟

姉君よ、あに悲しくて泣き給ふ、あに、あかじとや、されど、御身の睫毛につらぬける露の玉にていとしるきに、やよ泣き給ふあ、われは御身を慰めむ術知らねば、徒らに心の内に迷ふのみあるを、

姉

さか心おき給ひそ、そつろあき母君の唄ばれて……弟よ、わあみ過てり、あど汝まで泣き給ふ。あれ、汝の頬を涙の泉、瀧津瀬と流れ行くに、やよ、泣き給ひそ、姉のわれさへは笑みつゝあるものを、やみね面白き物語はなし聞かせんはごに。やみしとや、さかしきかあ、汝よ、その席にて音無う聞きていませよ。

日と長閑けき小春日の嶋の影さへあさはらけ、うつら／＼とかげらふの、もゆるも實にや静かある、かさはやの三穂の浦和の景色かあ。ときは緑りの松原や、松の調べに磯うつ波のあはれかめの夢をや破るらん、ま帆片帆、風をはらめる釣船に船人歌ふ聲清く、濱のまさごや忘れ貝、忘れじあ、ものゝやうには立たねども漁村のうゑるが語り草。

とほき、いと遠き、とほき昔のことかや、このわたりに住居するはくれうとやらん呼べる漁人の、ある日この松原をよぎりけるに、とある松が枝に麗はしき、見も習はぬ衣を拾ひてければ、打返へし／＼熟々に見やるに、わが老父が昔がたりによくしたまひし羽衣とやらんに、よく似たればいともうれしくて、雀躍りしつゝやがて家路にはしるほごに、後への方にて聲高く、あふ／＼またれよ、あふ漁人よ、と呼ばうやうきこえければ、ふと見かへるに、こはいかに、奇しやあ。

花の梢に照る月か、高峯につもる白雪か、葉末の露のまゑざしに、雲のびんづら、氣高くて、花に霞の装ひや、二十はかりの少女の、あふ舟人、その衣返してんやとよばひつゝ此方に急ぐ風情あり。

あたりのけはひに膽消たるさきの舟人ふりむきて、やよ少女子よ、この衣をかへせとや、われいかでかへさばらめや、されどわれはこの衣の主の汝にたがひなき証しを得まく思ふありと、いふに少女は、さればとよわらはこそ、世の外にある仙人よ、

その衣はいましにこそは用かけれ、われは空飛ふ天津女の、それなくては飛ぶと叶はず、あふ返してよ舟人と、眼をうるませ願ひける。

漁人も今はためらはず、やがて衣を返して、さらばおん身にまゐらせん、その報に音にきく東遊びの舞ひとやらんを見せ給へと、ひたすら請へば今はとて、羽衣着けつゝあよやかに舞ひて出でつる一さしの東遊びの舞の曲、衣の袂を春風にたあびかせては青空に、たあびかせては青空に、すがた霞に見えずかりぬ。

今もあは、波の鼓の静けくて、月影さゆる折々は、虚空に花降る音楽の聞こゆとや。

弟

いたくも興ある物語やあ。そのをりのはくれうが身の上の美ましくもねたくもあるかあ。

はや寒さの身に泌みて覺ゆるに、葉蔭の花のおん身には、ひとしほ堪へ難からむ、いざ室にいらせ給へ、はやさせ給へ、金屏のまへ、姉君會心の舞の手に我をして罪なき笑壺に入らしめ給へや。

姉

さのみ急ぐ事かは、あれ／＼見ませ雪の花、梢に白う花か、あらじ、胡蝶か、あらじ、風にゆられてもまる／＼は、雪姫が妙ある舞の袖よ。つたあきわあみが舞の手より、はるかまさりて興あらずや、あに興あしと、さあむつかりぞ、雪こそたくみの神が教へ給ふいみじき天地の舞の手よ、

門邊を音かう郵便の聲けたまうしう聞こゆるに、弟よ、とくいで見すや、兄君の音信あらましを……。

夏季休暇の冒険

第四年級 廣瀬 文豪

一瀉千里の明治の利器を用ひて遠遊し長汀曲浦、青松蔭涼しき白砂の上、さうやく浪に足をねぶらし、松にかかづる琴の音に、詩人の夢を貪るは、我等書生には縁遠き事ありと、予は京都二中に在る、弟もろとも、海にはあらねど大浪小波と、重り重る山の名所、美濃の西北ある廣瀬でふ片田舎に銷夏を企てぬ、

頃しも八月の初めつかたれば、庭の木蔭に蚊遣火燵べ、床机の上に寝轉びつゝ、團扇使ふも猶堪へ難き昨日今日、予等二人は日中とも云はず、洋傘一つに日蔭をさへ、木蔭もあき山道を辿りて行けば、旅衣は汗ににじみて色も褪せ、喉は渴き腹は飢えたれば、いで一掬の水求めんと、あたり見廻せども生憎くや、汲み得可き所には一滴の水もあくて、直下數丈の崖の下に、流るゝ川を空しく眺むるのみ喉を鳴らして、吾が身若し鳥あらばさかこつ折りしも、遙か森蔭に見ゆる小屋一つ、あうれしと駆け込みて、一杯の水を乞へば、一人の老婆出て來り、つく／＼吾等の様を打眺め、葡萄酒をも欺く溢茶を勧めぬ、平生あらば面しかむ可きに、渴に攻められし時のこゝろで、グツ／＼と呼吸も止めずに飲みほしたり、勇氣は此に百倍し、奮然此の屋を出づれば、日は早や西の方に傾けり、やれ急げ、此の邊は山と山との間あれば、日も早く暮れあん、暮れては山路いと危からん、急げ／＼と空しき腹をかへつゝ、半死半生の弟を引き立て、殆ど無中に横山村に向ひぬ、かくて漸く横山村に着きしは、午後三時頃ありしかば、此れは未だ存外早し、いで此にて晝食したふめてと、さあるあやしき飲食店に立ち入りぬ、此の屋の娘あるか、二人の女出て來り、山里のあまり面白く「菜は何にしませふか」「何分こゝ云ふ不自由な所ですかひ、何もありませんが、南瓜か鰻はどうで御坐いますか」と問ひぬ、南瓜は予は好かざれど、鰻こそ究竟あれ、早く仕度し呉れと急ぎ立てしに、や

がて二人の膳を持ち來りしかば、何の猶豫もあらばこそ、餓鬼の如くに箸を取り上げ、側に女どもの笑ふを構はず、無二無三に掻き込みぬ、始めの程は饑の爲めに何も氣付かざりしが、少し腹肥えて後始めて氣付きて鰻の惡臭、これ。失敗したりと弟に向ひ、ジス、フヒシユ、イズ、パツド、ドント、イト、モア、と注意せしが、弟は早や食ひ盡せし後ありき、今更不平を云ふも甲斐あきことあればとて、勘定をこゝろ店を出づれば、夕陽は將に西山に沈まんとして、暮色靄然たるにぞ、二人は此れは又急がざる可からずと、荷物を洋傘の先に引懸け、わき目も振らず進めば、日中の苦しさ熱さは消えたれど、衣に染みし汗の肌に付きて惡寒し、

又も羊腸たる山路を辿り行くこと殆ど二里余、志す廣瀬の最早や見らる可きに、一向其れと思しきものも見えざるにぞ、こは如何にしけん、狐に欺かれしか、道を誤りしかと、兎角疑の心解けざれば、折りしも出會ひたる牧童に廣瀬はと問へば、牧童はいと不審げに廣瀬と口の中にて、一人つぶやきしが、やがて頭を擡げ「御前等廣瀬へ行くのかい、此れは御前谷がまるで違ふて居るせ、廣瀬へ行くならもー一遍横山まで跡戻りせんあらんが……」といと氣の毒げに予等を眺めぬ、二人は此れは果して道を誤りしか、いかゞはせんとい時はまどひしが、今更せん方あしと、心を取り直し、「其れでは此處から横山までは何里ある」かと問へば、「さー二里余りじやねー」、落膽又落膽、此處より横山までが二里半、横山より廣瀬までが又二里半、都合五里の道、あゝ月もあき此の夜、人も通らぬ此の山路、一足踏みはづさば、身は忽ち猛りに猛れる谷川に眞倒、あゝいッを横山にて宿らんか、さりとて錢あきを如何せん、進退此に谷り、二人は暫し茫然たりしが、ふと河を隔て、向ふの山腹を見るに一條の山路あり、正に此れをん廣瀬の道あり、二人の心は忽ち奮然として勇み此の川を渡れば、直ちに志す道に着くを得べきに、何ぞ愚かにも二里の廻り道をあす可きやとて、急ぎ衣を

脱ぎて挟み、數丈の崖を這ひ下り、岩に激して雪を積み、矢と流れて目もまふ谷川に、予は弟を片手に導きつゝ、大膽にも、石多く流やさしき所を擇びて入り込みぬ、二足三足は何の難作なく踏みしめたれども、三足四足と中流に近けば、矢よりも早き谷川の流に、足は底に落ち着かず、よろめきつゝも此一大事と、顔色青ざめたる弟を抱きしめて、猶も進まんせしが、あゝ最早や進まる可きかゝ、水は俄かに深くあり、乳の邊までさきしにぞ、これはかゝはじと無二無三、一二間身を押し流されつゝも漸くに、後へ歸りてホツと一呼吸、弟は殆ど死せしが如く物をも得云はず、暫したゞすみしが、漸くに「あゝ怖し」と口を開きぬ、あゝ失敗又失敗、岸に上りて見れば衣はすぶ濡れ、殊に大事の荷物さへ、中は濡めりしにぞ、如何がはせんと心細く、今更己が無謀を悔ひつゝ、濡れし衣を絞りて、やゞと身に纏へば、如何に夏とは云へ、身は震ひ立つ程寒し、最早行かれまじと殆ど泣き顔ある弟を勵まし、何さしたることもあらざる可し、日本男子何ぞ此れしきの事に屈す可けんや、ふるゝ震ひながらの瘠我慢、あゝ金なき身の悲しさに、横山村を後にして、哀れある弟を携へつゝ、黒暗々たる廣瀬の山路にとかゝれば、目に見ゆるものは凄じきばかりの星影、耳に聞ゆるものは肝を冷まばかりの水聲、

秋のあした

第四年級 河村喜一郎

咲きみだるゝ躑躅の花はあらざれど、やれ籬に匂ふ、黃菊白菊、霜夜のあしたのもみぢ葉、露にたわめる萩が枝、野べに匂へる藤袴、何をかこちてか、うらみ顔ある葛花、たれとはかしにうちまねく花すゝき、至る所にそれゝ笑を含みて人を迎ふ、とりゝにをかしうあん。

されど、千々にものかゝしきは、秋もいたくふけぬ程、落葉にさゝやく夕ぐれ風の風、くさむらにすたく、蟲の聲のこたえがちなる、いさゝしくあはれあり。まして月かげさびしく、ねやのさぼをもれくるにはかき夢を結ぶ、其の心細さは、いかに花の、自然の美妙をあやつり、天然の薫香をはあつとも、あどてあぐさむることを得べき。

あさまだき起きて、獨り郊外にいれば、残りの星かげ、二つ三つ空にきらめき、夢の如く淡く、水の如くきよらかある、有明の月は、青ばのかげを、石上にさゝめて、いさゝむげあり。若木はたゞやすく睡れるのみにて、はるけき山海森野は、かは夜の幕のうちにあり。

嗚呼星はきらめけり。月はかゝやけり。さはれそのかげうすく、こほろき草むらに吟すれども、其の聲、かすかあるはいかに……………。

乾坤寂寥、聞ゆるものは、唯美妙の音楽をかゝる、川のかげと、はるかある木々の梢の、夜嵐に吹かれさゝめくこのみ。

われは進みて、さある小途に出でしが、折りしも模糊の中に見ゆる茅屋には、炊煙一縷、あはれ曉風に弄せらる。雞鳴二聲、寂寥をやぶりて、ひゞくころ、彼方の山のは、漸く白くありて白のへんじて、紅とかりぬるほごに、炊煙しげく雞聲かまびすし。

暫くにして、光まばゆき朝日は、早くも山のはに、此の大界の有様を、見んとするが如くに、さしのぞきたれば、一眸の裡に、森羅萬象あざやかに、茅屋点々かそふべくありぬ。

山腹をつゝめる朝ぎりは、恰も強兵進めば弱兵しりぞくが如く、朝日、一步昇れば、曉霧、一步滅ツし、つひにはくまなく、打拂はれぬ。

余は、水かれて、瀬あらはかる小川の、丸太もて架したる橋を渡り、又もあゆむに、いつしか見はらしき所に至りぬ。

しげれる松原のひまより、にはの湖に、白帆の点々たるが見ゆ、いづこをさして、こきゆく舟あらん。浪青く、真砂白き渚には、はや小女子の、たはむるゝが見ゆ、貝拾へるにやあらん。
あゝ楽しいことよ、閑あることよ、

我が新年

第三年級 清水 省 三

新年！、新年！、嗚呼吾はかく叫ぶだに、總身の毛の戰慄を禁する能はざるあり、強ちに、此世を憂きもの悲しきものとて、悟り顔する吾にはあらず、「門松や冥途の旅の一里塚」てふ消極の嘲笑に、得たりとあせる吾にはあらねど、この「新年」てふ言葉に襲はるゝ時は、何とあう、さしぐまるゝを如何にかせむ、よしやいかめしき注連繩にまゐるき橙の正月らしく、行き交ふ人の素振り心地よげあるも、そは唯表の一わたり、薄紙一重の裏のさまで、いかばかり心さむけきことさはあるや、酒れ果てたる藁、枯色の莖のそれよ、果敢なき思の深う浅う、時々と變りゆく空の雲のごときうつし世には、一睡のゆめ、枕冷やかにして醒めやすく、もゆるばかりの青年の客氣。一陣の風に消え易き、泡沫のごとき、實に、両の頬に潮させる屠蘇の紅に似たり、この世のこの新年、そも何がゆるに、樂しき、何がゆるに芽出度き、獨樂と風とにひねもす餘念なき稚き兒等だに、過ぎゆく春を惜むとかや、まいて、五尺の壯者、一わたりの俗情を辨へたる男子の、ゆく手遙けき艱難のわたつみの、浪の高きに氣もどめで、雜煮の餅に、太平樂の腹鼓をうち、僅か數日の、世の静寂を喜びて、何を祝ひ、何を壽ぐや、計り知られざる淵の深みのごとき人の心、吾は推するにあやむことしきりあり、まいて、家に千金の玉手函積み重ね置くにもあらず、身に萬目の渴仰を荷ふべき價のあき吾の明治五七の今朝の窓、明けて悔しや十八歳とはありぬ、のみあらず、三ツ子の魂の我慢根性、百か五十か、限りさためぬ命と共に、それよくと煽りたてつ、よし人並に賀辭を述べ、賀狀を書きて、吾も浮世の一匹よと肱張りぬとも、東雲のそらの明星のかげか、消えやすきよしあき頼の、あどかたのまるべきぞ、たゞ／＼柱とたのむ希望の杖に、よろめく足を辛くもふみ止めて、一日一日と行かんのみ、元日と云はず、正月と云はず、破れ布子一枚の我姿に、獨り含笑みて、獨り嘯くの外、何をよろこんで何を歌はむ、さりや、壽はぐも／＼のうし、我が新年。

嗚呼吾等が父母

第三年級 廣瀬 淵 龍

父母の恵みは、海よりも深く、山よりも高しとは、誰がいひし語ぞや、殊に、吾等が父母の、子を思ひ給ふ御心は、あべての親にも、まさり給ひて、いと深く、いと厚く、おはしませり、あゝかゝる、廣大無邊ある父母の御恵は、いかにして、報いたてまつらむか、これ吾等子たるものゝ、深く心せざるべからざるところあり、然るに、廣きこの世の中には、父母の深き恵みを忘れて、不孝の罪を犯すもの、少しとせず、これも無學文盲の輩にいたりては、聊か情のくむべきものも、あるに似たれど、日々、文明の教育をうくる、青年にして、父母の恵を、忘るゝにいたりては、げにゆるしがたき、罪人といふべきあり、古語にいはすや、親に對して、孝ある人は、必ず君につかへて、忠あり、親に對して、不孝ある人は、又君にむかひて、不忠あ

りと、蓋しこれ萬世不變の、金言あり、海山の、恵みをうけつる、父母の、この世におはする間に、いかで、報恩の事、あくてやは、この心は、誰しもの、ここながら、如何せむ、我身未だ、志を遂げざるに、早くも父母は、冥土をたごらせ、給ふことあるを、あゝ、かゝらむ折は、末にこそと、思ひし、孝子の情も、水の泡とあり、いかに、悔ゆとも、その甲斐あからむ、世の、青年學生、人々よ、古來忠孝を以て、顯はれたる、皇國に生れ、日夜、師の懇ろある、教をうけながら、徒らに、末の孝のみを、恃みて、後の悔いを、のこすが、如きこと、あるべからず、古語にいはすや、樹靜かあらむと、欲すれども、風止まず、子養はむと欲すれども、親待たずと、

竹嶋に遊ぶ記

第三年級 寺前 伊藏

竹嶋は、琵琶湖中にある一島にして、其位置湖の中央にあり、廣さ僅に一町有餘と雖も、其景の佳あるに於ては、まことに無雙と云ふべし、予一日學びの閑を得て、朋友數名と此島に遊びぬ、時しも炎熱赫々たる夏の日、オールを肩にして八景亭側より纜を解き、波止場より斜に西南の方向に漕ぎ出せり、此日そら晴れ渡りて涼風徐ろに衣袂を拂ひ夏を忘るゝ計りあり、漕ぎに漕ぐほごに、初め縹渺の間に認めし島は、漸く目前に迫れり、舳を東南にして岸に着き、遂に岩階を登りて左すれば一寺院あり、内には一老婆の住するのみあり一同は茶を乞ひて休憩すること三十分にして、道を北にとり五十歩程にして蟻門渡と云ふ所に達す、瞰下すれば、水は碧を凝して藍の如く、見るさへ頭髮の立つを覺ゆ、漸く進めば忽然一大巖石の屹立するに遇ふ、岩の東面に南無妙法蓮華經の七字を刻む、其近傍石皆突怒偃蹇して斷崖奇石數ふ可からず、或は仆れんとするが如く、或は龍蛇の蹲れる如く、青苔石を蔽ひて松其上に生せり、岩に踞して北を望めば、伊吹山をより立ちて一帶の白雲嶺を包み、竹生島賤が嶽は雲霧の間に髣髴たり、東は彦根の舊城及び佐和山在り、西南は一望際あきあたる、遙に比叡比良の諸山を望むべし、其景色の美あること予輩の凡筆もていかで其眞景を寫すことを得ん、飽かぬ眺めに歸るを忘れてあるほごに、群鴉遠く山里に歸るを見て、驚きながら皆諸共に岸邊におりて船をかへしぬ。

六花繽紛

第三年級 山本 繁七

△雪の朝

あさまだき書齋の窓のひしめく音に驚かされて、不圖目を醒せば、木枯すさふ吹雪ありけり。さこそは積りけめとひとりごちつゝ戸をおしあぐれば、こはそも如何に野も山も見渡すかぎり、白雪に埋もれて道だに見えわかず、枯にし木々の梢に雪積りて、時あらぬ白がねの花さかせ、老松の千年榮ゆる色見えて、打笑へる一しは勇まし。はるか田の面に案山子の二つ三つ雪にさらされたるもおかしく、土手通る人の履に高く雪積りて、まろびては又おくるあど、いといたましげあり。小ある犬のをばに遇ひしとうれしげに飛びまはり、後追ふわらべのくるひつたはむれつするさま、大和男の兆見えていと頼母し。遠近を眺むれどいづれも同じあはれある冬の景色あるに、たゞ南窓の梅のまだ句はぬあむ、物足らぬ心地すれど、そもわれにさきがけの余地を與へけるにかと、うちほゝるまれぬ。

△冬の水仙

吹きしきる風は、耳をも劈かんばかりあれば、その寒さに堪へかねてか、あべての本草の萌え出でぬけはひも見えぬ今日此頃、獨りさむさも冷さもいとはず、白がねの中にはほろろめるは、これかむ水仙の花、あゝいさましきか。吾は寒さにたへかねて唇ふるへつゝ、語るも懶き程あるに、あはれ水仙よ、汝はいさましきか。折しも一陣の風は、水仙の花をゆすりて、一しほほろろまれぬ。

吾は水仙の咲く時、つね々々思ふあり、人の心はかくもがあと。

△吳竹の雪

木枯すさぶやみの夜半、雲は雪を孕んでみ空を渡る雁の聲もいとあはれあり。其夜われは思ひ沈みて淋しく床につきぬ。夢は故郷にさまよふ折しも柴の折戸を叩く音あり。ふと目を醒ませば、夜やいたく更けぬらん人の聲だになくていと静かあれば、友ごちのおとあふにもあやしの者にこそあなめれ、要こあれど、短刀片手に、戸を押しあけながら、つくづくと見れば、あかうたて、そは曲者からで、庭の吳竹に積れる白雪の、柴の扉にほろろと落つる音にかむありける。あゝ笑止の極みや。

人々よ心は妄りに動かさぬ者ぞかし。われは此の事思ふごとに、背に汗のしたるを覺ゆるあり。

山里日記

第三年級 中 川 醇

今年冬季休暇を得て、師走の二十六日といふに、山里ある、伯父君かりを、訪づれて、ゆくりなく、初春を迎ふこととはありぬ。

吹雪に閉き、破れ戸を打つあらしに、昨日けふ、往來たえて、かしこに一つ、こゝに二つと、はかれてあらべる、茅屋の門邊を、朝まだきに、鳴きすぐる小狐の聲、實に冬の寥しさは、山里にしくものあらじか。遠近の山は白たへの、雪の衣につつまれたるに、うかる等は、鳥を捕らんとてや、二三つれだちて、細やかある竹片に鳥糞つきたるを携へて、出で行きぬ、わが子の歸へり、あまりおそきに、待ちわびて、母親のめぐみ深くも聲高く、あと呼ばれぬ。

槽火にうちより、四方八方の、話に夜はふけて、風寒くひとしほ身にしみわたるて、寂たる中に只だ庭ある立木の風に吹かるゝ音のみ高く、細く清けき、月影の圓き小窓にうつす木影の骨のみあらはる、あはれにもまた悲し。

二日三日と晴れゆくまゝに雪溶けて、山畑に正月の用意にとや、鋤持ちて菜とる人の影二三見ゆ、山邊には薪木拾ふ少女も正月の樂しさを待ちわびてや、優しげある聲に、年の始めの目出たさをと、歌ふもいとゆかし。

たま／＼ひびく銃の音に、飛び去る小鳥の影みやりては、あら心あき人や、とつぶやきあぞす。さすがに山里は、金囊もてめぐりありく人あし、世のことにかゝつらはぬ、身もいとゞうれしき心地あむする。

はの／＼と明けゆく空、うら／＼かにさし昇る、旭日も何となくけふはのどかある心地しぬ、戸のはどりにつらね立てたる門松は、常盤の色をあらはして、軒に掲ぐる日の御旗は、高くひら／＼と翻りつ、初春の喜び述ぶとや、衣紋かいつくろひて、行かふ人影にいつに／＼、里のにぎはひあり。

村はづれの小さき森の社には、今朝より鈴の音たえず、拜殿の前には少女の羽子つきかはして、樂しげに歌ふ君が代いと目出たし。

日は落ちて、家々に、笑ふ聲もいと高かりしが、やがて静まりて、夜は寂闇として、遠くほゆる犬の聲、い
とかなすかあり。

漢詩

湯河原

市瀬雨山

山圍三面向陽開。曲曲寒溪翻雪來。況有溫湯蘇病骨。可不獨洗塵埃。

湯河原除夜

家住琵琶湖母廣洲。金城季弟馴貔貅。仲獨從母奉杖屨。吾在相南病後休。三婦六孫同安福。支離商參不必憂。
季卒大學仲益倖。母氏勞瘁半得瘳。吾亦積年忘宿疾。赤社醫恩何以酬。想見慈顏溢喜色。妻子僂指數回輒。
兄弟今夜饒牛歲。東西四處共解愁。

除夜

以下舊作

久客恐爲猿鶴羞。江湖萍迹幾沈浮。響霜寒柝徹心切。守歲青燈照影幽。自古樗材無世用。于今病廢有窮愁。
回頭歎息十年事。千百經營一不酬。

除夜

無端唱出鳳兮歌。三十六年空逝波。山澤風煙促人老。酒醒燈冷恨如何。

漢詩二首

第五年級 林 富之助

朝晴

千峰皆帶雪。皎潔弄朝晴。忽被紅暎照。變成紫石瑛。

梅花

不待春風到。山中帶雪開。清曜高士節。眞作百花魁。

新體詩

明星

第五年級 松居源四郎

日は山の端にうすつきて、
黄金まばゆきあや雲の、
黒き衣につつまれぬ。
空のかたちを見あぐれば、
癒えぬ矢瘡のつめたくも、

神の御征矢は雲に落ち、
血汐の色のうすらぎて、
静けき星のかげ一つ、
下界の暗をてらすかゝ。